文章を評価する力を育てるために

ー表題読みをもとに，文章の姿を予想して読み，質の高い課題をもつー

岩　本　和　貴

1　はじめに

本校国語科では，昨年度より課題づくりの過程を見直している。課題解決的な学習の質を大きく左右するのは，どのような課題を設定できるかによる，と考えたからである。また，入門期の国語科学習では，様々な学び方の基本を身に付け，確立する必要がある。質の高い課題設定を行う能力が，学び方に広がりと深まりをもたらすことになるだろう。

ここでは，説明的な文章の実践をもとに，子どもが文章を評価することのできる能力を高める学習活動の工夫について述べる。文章を評価する能力が高まれば，設定する課題の質も高まるであろう。また，質の高い課題を設定する経験そのものも大切にしたい。

2　質の高い課題づくりを目指して

(1)　表題読みを積極的に活用した，本年度の取り組みの概要

今年度学習した説明的な文章教材は次の４つである。

①「とりとなかよし」（光村図書）……７月

②「じどう車くらべ」（光村図書）……10月

③「どうぶつの赤ちゃん」（光村図書）……11月

④「みぶりでつたえる」（教育出版）……１月～２月（取り組み中）

一口に質の高い課題といっても，その実現のためには，かなり高いレベルで文章を読みこなす必要がある。これから国語の学習を行う子どもたちにとっては，何かを手がかりに読むことで，課題をもちやすくする配慮が必要である。一般的に「読みのめあて」などの言葉で設定されているものであるが，学習の初期の段階では，ほとんどの場合指導者主導で行われる。子どもたちにとっては，めあてが必然性をもたない場合も少なくない。

そこで，子どもたちの手による「読みのめあて」を設定し，読みの動機づけを確かなものにし，観点をより子どもに近づけるために，表題読みを積極的に取り入れることにした。より確からしい内容を予想し，自分たちの予想と比べて読むことで，事例の取り上げ方や文章構造についての感想をもちやすくしたのである。４つの説明的な文章の教材は，全て２文節から成る表題である。イメージを広げやすく，表題読みの仕方も次に生かしやすい。

(2)　表題読みで読みのめあてをもつ

表題を手がかりにどのように内容を予想していくのか，その結果どのような感想が生まれるようになったのか，比較して述べる。紙面の都合で「じどう車くらべ」は略した。

Ａ．教材「とりとなかよし」

この教材における表題読みでは，ａどんな「とり」のことが書いてあるか，ｂ「なかよし」とはどういうことか，の２点から予想を広げた。

ａ．どんな「とり」のことが書いてあるか

○子どもたちの予想内容（発表順）

・つばめ　・すずめ　・にわとり　・からす　・きゅうかんちょう　・くじゃく
・おうむ　・いんこ　・とき　・さぎ　・つる　・たか　・ふくろう　・わし
・ぺんぎん　・だちょう　・こうもり（ほ乳類だがそのまま取り上げた）

「とり」について絞り込む手がかりは，これ以上ない。子どもたちからは，絞り込み

のための意見として，次の２つの提案がなされた。

ア．飛べる鳥と飛べない鳥について説明してあるのではないか。

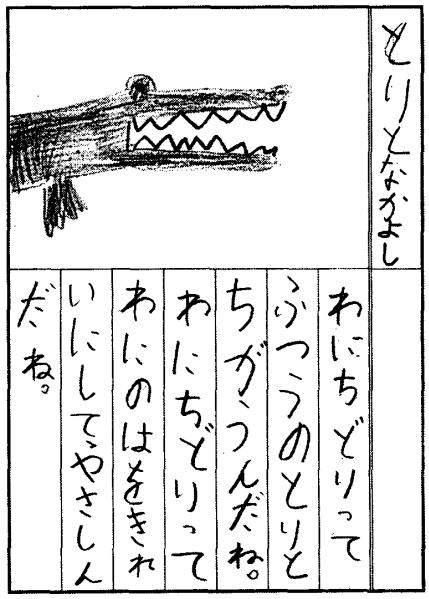
イ．自分たちのよく知っている鳥について書いてあるのではないか。

アについては，この時期の１年生としては面白い気づきだと言える。しかし，この観点では「なかよし」という言葉で示された内容とつながらないことを指摘した。イの考えは根拠に乏しい。

b．「なかよし」とはどういうことか

○子どもたちの予想内容

ア．とりが，みんなでなかよくくらすこと。
イ．どうぶつととりが，なかよくくらすこと。
ウ．にんげんととりが，なかよしになって
　あそぶこと，くらすこと。



資料　1

アについては，「とりと」という観点を提示したところ，「とり」以外の生き物が対象として書かれているはずだから，違うのではないかという話し合いになった。

手がかりがあまり多くないところで，考えを深めるための話し合いをもつことは難しいので，ある程度考えやイメージを拡散したところで，「さあ，教科書にはどう書いてあるでしょう？」と投げかけるようにしている。

このような予想から，文章を読んで初発の感想をもつことになる。読みのめあては，表題読みのまま，a．どんな「とり」のことが書いてあるか，b．「なかよし」とはどういうことかという点になる。

子どもたちの初発の感想を整理・分類すると，次のようになる（児童40名）。

○平均字数60字程度（句読点の打ち方が曖昧なため多少の誤差あり）。

○「わにちどり」と「わに」について述べたもの。……25名

○「あまさぎ」と「ぞう」について述べたもの。……19名

○「うしつつき」と「すいぎゅう」について述べたもの。…… 9名

この結果は，子どもたちが「とり」そのものよりも，共生している動物や共生の内容のインパクトに左右されていることを示している。「わに」の口の中で「かす」を取る「わにちどり」は，衝撃的だったようだ。また，「わに」「ぞう」は子どもたちがよく知っている動物で，イメージが湧きやすい。「すいぎゅう」を「うし」と書いていた子が多いことにも，それは表れている。

ほとんどの子が，動物とそれに共生する「とり」の両方の記述に及んでいた。しかし，「とり」と動物の関係について明確に言及しているものは８名だけであった（資料１参照）。必要な支援の工夫は，内容に反応する子がほとんどであるところから，どのように課題を設定するのか，文章構造に関わる気づきをもつことができるようにするにはどうするか，の２点である。

B．教材「じどう車くらべ」

「じどう車」と「くらべ」を分けてイメージする提案があった。

a．どんな「じどう車」のことが書いてあるか

○子どもたちの予想内容（発表順）

・パトカー　・きゅうきゅう車　・トラック　・しょうぼう車　・バス　・タクシー

・じょうよう車　・せいそう車　・バイク　・クレーン車　・レッカー車
・スポーツカー　・キャンプカー　・ダンプカー　・タンクローリー
・ゆうびんはいたつ車　・どうろこうじ車　・おそうしきの車

b．何を「くらべ」ているか

○子どもたちの予想内容

ア．スピード　イ．おおきさ・おもさ　ウ．はたらき・しごと　エ．かたち・いろ

子どもたちの初発の感想を整理・分類すると，次のようになる（児童39名）。

○平均字数70字程度。200字を超える子も数名いた。
○「じどう車」の作りや仕事の違いを比較したり，疑問・気づきをもったもの…… 6名
○特定の「じどう車」についての疑問・気づきをもったもの……32名
○「じどう車」の種類の多さだけ述べたもの…… 1名

前教材と比べて，読みの実態に変化はない。長い感想文を書けるようになったこと，表題読みの仕方が定着したことを，学び方の面での伸びととらえたい。個々の「じどう車」の作りや仕事について，細かい気づきや疑問をもつようになったことも評価できる。

C．教材「どうぶつの赤ちゃん」

表題読みも３回目（文学的な文章教材も含めると５回目）になると，ある程度の約束事ができてくる。様々な視点は必要であるが，現段階ではひとつの方法が定着することを大切にした。

a．どんな「どうぶつ」のことが書いてあるか

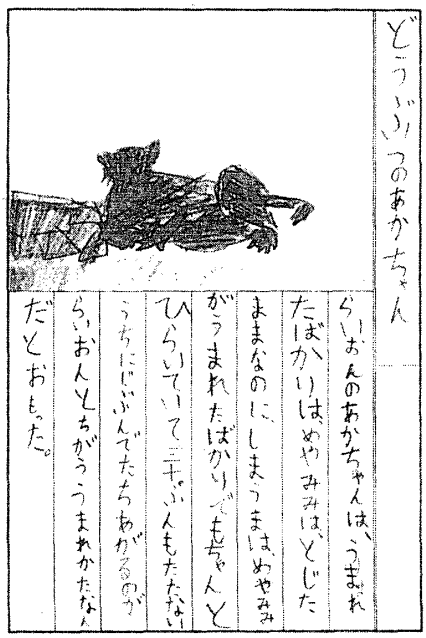
○子どもたちの予想内容

・トラ　・ライオン　・ゾウ　・ウマ　・クジラ
・キンギョ　・ハムスター　・キリン　・犬
・ネコ　・リス　・カメ　・ウサギ　・クジャク
・ツバメ　・カバ　・サイ　・チーター　・サル
・ヒョウ　・ゴリラ　・ハト　・アヒル　・ヘビ
・トカゲ　・パンダ　・クマ　・イルカ　・サメ
・タヌキ　・キツネ　・コアラ　・カンガルー
・ニワトリ　・シマウマ　・ウシ　・ペンギン

b．「赤ちゃん」について，何を説明してあるのか

○子どもたちの予想内容

ア．大きさ。おもさ。
イ．生まれかた。
ウ．そだちかた。
エ．おちちをのむか，のまないか。たべもの。
オ．たまごで生まれるかどうか。



資料　2

これまでの学習経験から，いろいろな「どうぶつの赤ちゃん」を比べて書いてあるということは前提となっているようで，話し合いの焦点は，①どんな動物の赤ちゃんの，②どんなところを比べているのか，に絞られた。

予想した動物全てを説明しているはずはないから，グループ分けして考えたらよい，という提案があった。グループ分けの視点はb「エ．たべもの」におく子が多かった。子どもたちはテレビ番組などで，肉食・草食という分類に親しんでいるようだ。観点は異なるが，鳥類・鯨類を他の動物と分けて考える意見も出た。居住環境や形態が他の動物と大きく違うため，考えやすいようだ。話し合いの結果，肉食動物・草食動物・鳥類・鯨類から，１匹の動物について書かれているのではないかという予想が立った。

比較点については，分類の観点上最も違いの見られそうな，「イ．生まれかた」「エ．おちちをのむか，のまないか。たべもの」「カ．たまごで生まれるかどうか」を予想した。aで動物を絞り込むときの観点はbをもとにしたのだから，比較点も一致しなければならない。その意味で，「エ．おちちをのむか，のまないか。たべもの」が挙げられたのは妥当な考えであった。他の2点はほぼ同じ内容と考えてよいだろう。

子どもたちの初発の感想を整理・分類すると，次のようになる（児童39名）。

○平均字数95字程度。300字を超える子もいた。200字を超える子が多い。
○「ライオン」「しまうま」の違いを比較し，疑問・気づきをもったもの ……20名
○「ライオン」についての疑問・気づきをもったもの……15名
○「しまうま」についての疑問・気づきをもったもの…… 2名
○新しく知識を得た喜びを書いたもの…… 2名

事例の違いを比較し，疑問・気づきをもったものが，「とりとなかよし」「じどう車くらべ」と比べ，大幅に増えている。論理展開の良さもあるが，子どもたちが「2つの動物を比べるんだ」と意識を強くもっていたことの表れである。説明的な文章の学び方として，ひとつの形が定着しつつあることの表れとも言えるだろう（資料2参照）。

「ライオン」についての感想が多いのは，内容の意外性によるものと考える。「ライオンの赤ちゃんが，～だなんて，びっくりしました。」という表現が多かった。筆者の書きぶりも「しまうまの赤ちゃん」に対して思いが強く表れているが，それに強く影響されていると言えるだろう。子どもたちは読み手として，内容にしっかりと踏み込んでいることを感じた。文章の記述の細かな点にも着目し，疑問・気づきをもつことは，ひとつの進歩と言える。しかし，特に説明的な文章を読む際は，内容に影響されない客観的な読みが必要である。低学年の子どもたちなりに，そういった読みができるような手立てを継続する必要がある。そのための手立てを次項で述べる。

3　具体的な実践～「どうぶつの赤ちゃん」の取り組みを中心に

(1)　論理構造に着目する読者を育てるために

前項でも述べたように，課題づくりの質を高めていくためには，子どもたちが論理構造に注目して読むことのできる姿勢と力を身に付けるようにする必要がある。初発の感想の段階で，内容中心の読みから，より抽象度の高い客観的な読みへ高めていくのである。

(2)　比較点を抽象化して比べる

「どうぶつの赤ちゃん」は，1つの事例に多くの比較点をもつ。対比の仕方が明確で，両者の違いが分かりやすい。事例の比較を行う上では，動物の成長の時間経過を踏まえたワークシートを完成する過程で，比較点を抽象化してとらえ，両者の違いをより明確にできるような配慮をした。特に「しまうま」の成長について述べてある段落を中心にして，「ライオン」の事例と比較できることに気づくことをねらった。具体的には「しまうま」の事例について，ランダムに発表した板書内容を並べ替える必要性に気づき，問題提起とライオンとの比較点に注目することで，それぞれの事例を抽象化できるようにした。

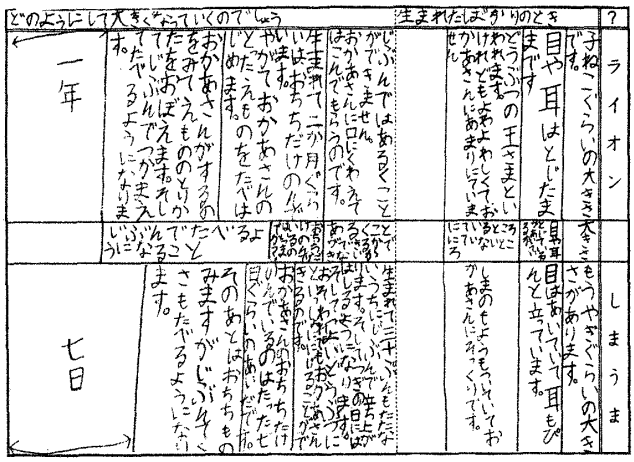
授業の展開は次のようなものである。◎は特に柱となる支援。

学　習　活　動	教　師　の　働　き　か　け
1　学習課題を確認する。	1・本時の学習課題を全体の見通しの中で確認する。
ライオンとシマウマの赤ちゃんは，どこがどんなふうにちがうのかな？	
2　シマウマの赤ちゃんの様子につい	2　個人で音読しながら，書き抜くのに適切な

て書かれている点をつかむ。 ・第３段落を音読し，書き抜く部分に傍線を引く。 ・発表する。	部分を探すことをめあてにもつよう指示する。 ・前時を想起しできるようにする。 ◎子どもの発表した順に，ランダムに板書することで，問題提起文との対応とライオンの事例との比較の観点を意識できるようにする。
3　ライオンとシマウマの事例がどのように比べられているか理解する。	3◎「このままで比べることができるかな」 ◎まとめ方についての意見を評価し，取り上げる。 ◎問題提起文と比較の観点に注目して板書を整理することで，抽象化を促す。 ・比較や強調，程度を意識した表現に気づくことができるように，それらの言葉がある場合とない場合の違いについて考える場を設定する。
4　ライオンの赤ちゃんとシマウマの赤ちゃんの違いをふりかえる。	4・文中の表現や比較の仕方について，気づいたこと・感じたことを自由に言い合えるようにする。 ・各自のワークシートに書き込む。

(3)　実践のふりかえり

本時の学習過程を全て終えることができなかったのは心残りだが，子どもたちは事例の要素を抽象化してとらえ，それなりの言葉にまとめることができたのは大きな収穫である。



１年生でもある程度の抽象化は可能であると言える実践になった。今後の教材の課題づくりに反映する力として，その導入時にしっかりふりかえりたい。

国語科の成果と課題でも述べてあるが，この実践をスパイラルにつないで，子どもたちの読みの力を伸ばしていかなければならない。そのためには，ふりかえりと課題づくりのかかわりを，子どもたちにも明確なシステムとしてとらえることができるようにする必要がある。

4　おわりに

本年度の実践の成果として，質の高い課題づくりのためのひとつの形が定着したことが挙げられる。しかし，前項でも述べたように，課題づくりがそこだけで完結してしまっては意味をもたない。次年度も，課題づくりを如何にするかという点でカリキュラムを編成し，課題づくり→追究→ふりかえりというシステムを循環させて，子どもたちの読みの力を総合的に伸ばしていこうと考えている。